

特集「建築とテクトニック」

建築家のウィトルウィウス以降にイタリアのフィレンツェで2人の建築家が誕生した。それらは建築の外観のデザインを得意とするレオン・バッティスタ・アルベルティと、構造や構法までもデザインすることができたフィリッポ・ブルネレスキである。

また、増田友也は体育館計画や京大会館計画を行う中で、構造と表現の分離に着目するようになった。「構造的現実と表現的真実——中性的伝統の理解のために」では、中世和洋建築の三明寺の三重塔に対して、「構造的洗練さなどはまったくどこにも見られぬと言っても過言ではない」と述べ、構造美の欠如を批判している（『増田友也著作集Ⅰ』p.180）。われわれも建築の構造美の問題をどのように考えれば良いのだろうか。

その考察として、テクトニックを建築論で取り上げてみようと思う。テクトニックとは、ギリシア語の *tekton* を語源とし、「結構」と訳された言葉である。元々は大工や建設者を意味する言葉であった。彼らの「技芸」がテクトニックと捉えられ、「事物を構築する美的判断」という意味が付加されている。それに対して、ケネス・フランプトンがゴットフリート・ゼンパーの建築芸術の四要素である炉、基礎、骨組、被覆を取り上げた。さらにはその理論を発展させて、基礎に該当するステレオトミックと骨組を意味するテクトニック（結構）を建築の原型とした。また、被覆を地域固有の文化として、建築の原型と共に現代建築への検討を適用可能としている。いわばテクトニックを考えることは、均質化から逃れるための一つの方法である。ここで、地域固有の風景・文化に共振する建築は可能だろうかという問いを立ててみよう。近年、増田友也について自然を論じた建築家として再評価する動向もあり、自然で構成される地域固有の風景と建築を考えることは極めて現代的な問題である。画一的な建築を嫌う批判的地域主義を支持する立場において、テクトニックは架構の骨組以上の意味を持ち、空間を超え風景の質を確立する重要な要素となる。今またテクトニックを問い、自然・風景の観点から建築論の分野を問い直そう。